

方法知と命題知について

井上 颯樹 (Satsuki Inoue) ・ 丸山 望実 (Nozomi Maruyama)

千葉大学 ・ 九州大学

本発表で扱う主題は、方法知 (know-how) と命題知 (know-that) の関係をめぐる論争である。この論争は、以下のようなものだ。

私たちの知識はいくつかの仕方で区別されうる。その中でも一般的に念頭に置かれている区別は、知識を二種類に区別するものだ。第一に、命題知と呼ばれるものがある。例えば「日本は島国である」といった、言語を用いた文の形式で記述される知識が命題知である。第二に、方法知と呼ばれるものがある。これは例えば、テニスをプレイする技能や自転車に乗る技能を有している人が持つ、特定の振る舞い方ややり方に関する知識だと考えられている。

この論争のきっかけとなったのは、Gilbert Ryle による議論である。彼によると、方法知と命題知をめぐって二つの立場の対立が起こる。第一の立場は、上記の区別を否定し、テニスのプレイの振る舞い方のような方法知と呼ばれる知識は、命題知によってすべて説明可能だと主張する。この立場は、主知主義 (Intellectualism) と呼ばれる。この立場に対して、方法知と命題知は区別されるのが自然だと考える第二の立場は、反主知主義 (Anti-Intellectualism) と呼ばれる。

近年、主に支持されている主知主義の立場は、Jason Stanly と Timothy Williamson によるものである。彼らは方法知が「いつ」「どこで」に関する命題知や、指示語を用いた命題知によってすべて説明可能だと主張する。この考察を通じて、反主知主義者による一見すると自然な立場は誤っており、方法知と命題知は別種の知識として区別されるべきではないと主張するのが、彼らの主知主義である。

Stanly と Williamson が主知主義的な立場を展開する際に、批判的な検証対象とするのが、Hubert Dreyfus の反主知主義的な立場である。Dreyfus は、私たちの日常の行為とそこに含まれている技能的な振る舞いを分析することを通じて、これらの行為は命題知といった心的表象では説明できないと主張する。というのも、技能的な振る舞いにはスピーディーさやきめ細かさが最も重要であり、その際には命題知による説明を必要としないためだ。

しかし Stanly と Williamson は、Dreyfus に基づいた反主知主義的な立場は誤っていると指摘する。彼らの主要な批判は、Dreyfus が技能的振る舞いにおいて、命題知をはじめとした心的表象の存在を否定している点にかかわる。というのもこの主張は、技能的振る舞いが行為者の抱いている心的な理由から独立しているという結論に結びつくと思われるためだ。

この結論に対して、Stanly と Williamson は以下のように指摘する。確かに、私たちの技能的振る舞いはスピーディーかつきめ細かいものでなければならない。しかしながらそのような振る舞いはまた、行為者によってきちんと制御された行為であることが説

明できなければならない。そしてこの点を説明するためには、行為者の持つ理由や命題知といった、心的で知的な構成要素が必要になると考えられる。しかし Dreyfus はこの点をきちんと説明することができていない。このことから Stanly と Williamson は、Dreyfus に基づく反主知主義的な立場が失敗していると批判する。

本発表では、この対立について検討を行う。すなわち、テニスのプレイのようなスピーディーかつきめ細かな技能的振る舞いを説明する際に、命題知といった心的表象は介在している必要はあるのか。また、そのような特徴を持つ技能的振る舞いが、知的に制御された行為であると説明するために、本当に命題知が必要なのかという点について検討を行うのが、本発表の目的である。

この目的に向けて本発表では、Stanly と Williamson が Dreyfus 的な反主知主義を批判する際に、彼の議論の一側面しかとらえることができていないのではないかと指摘する。というのも確かに Dreyfus は、技能的振る舞いにとって心的表象が介在している必要はないと主張する。しかしこの時彼が否定しているのは、テニスのプレイを構成するラケットの構え方といった個々の行為を引き起こす心的表象の存在であり、例えば「テニスをしよう」といった大まかな命題的意図が行為のトリガーになっている可能性や、「なぜそのように振る舞ったのか」と尋ねられた際に、行為者が事後的に理由を答えることのできる可能性を Dreyfus は認めているためだ。

本発表では、これらの Stanly と Williamson が十分に検討していないように思われる Dreyfus のアイデアに基づいて、反主知主義の擁護を試みる。また、この擁護が Stanly と Williamson によるさらなる批判の可能性を免れているのかを検証することで、方法知と命題知をめぐるより洗練された反主知主義の立場の考案を試みる。

・参考文献

- Dreyfus, Hubert. 2001, “The Primacy of Phenomenology over Logical Analysis,” in *Skillful Coping Essays on the Phenomenology of Everyday Perception and Action*, Oxford University Press, 2014, 146–167.
- Dreyfus, Hubert. 2005, “Overcoming the Myth of the Mental; How Philosophers Can Profit from the Phenomenology of Everyday Expertise,” in *Skillful Coping: Essays on the phenomenology of everyday perception and action*, Oxford University Press, 2014, pp. 104–124. [ヒューバート・ドレイファス, 2008 「心的作用の神話の克服—哲学者が日常的な熟達者的知識の現象学からどのように恩恵を受け得るか—」 蟹池 陽一訳『思想』No. 1011, 岩波書店, 34–79 頁]
- 井上颯樹, 2024, 「反主知主義を改訂する」『人文公共学研究論集』第 48 号, 1–14 頁
- Ryle, Gilbert. 1949, *The Concept of Mind*, Hunchison. (ギルバート・ライル『心の概念』坂本百大ほか訳, みすず書房)
- Stanly, Jason. and Williamson, Timothy. 2001, “Knowing How,” in *The Journal of Philosophy*, vol. 98, no. 8, pp. 411–444.
- Stanly, Jason. and Williamson, Timothy. 2017, “Skill,” in *Nous* 51:4, pp. 713–726.